

京鹿子

京鹿子
10月1日発行
1000円

5月号

豊田都峰

渚響集 その三十三

のぼるでなくふもとのみちや梅二月
はぐれではひぐれのなかの梅二輪
川風と来てかざはなの小督塚
橋渡り雨のはこべる春ひろはむ
草青む十帖の碑の二つ三つ
「早蕨碑」椿のひとつ落ちてゐし

字の濃きに思ひをこめれば春めきぬ
らふそくを捧げてよひの春の雨
蝌蚪のくに天日ひとつはめりたり
隠沼の日はしろがねの蝌蚪の昼
春めきて駆けるかたちに幹もまた
日をつれて風のきてゐる辺の蘂
忘れ角見しより山に晴れつづく

「俳句四季六月号 京の春 十六句」掲載

卒業式

丸山佳子

足音で心がわかる卒業式
雛まつり鳩と雀は砂あそび
卒業生赤いポストに見送られ
春愁の身をはねかへす椅子のバネ
おしぼりに目鼻浄まり地球の日

秀華採集

梟の闇のうしろにあるふくろふ

井上 菜摘子

自分を見つめる自分。あくまでそれを出さずに、一つの形として表現する。「ふくろふ」としたのはまだつかめていないなにかであるうからであろう。

寒紅や花びら餅を手みやげに

山本 正

蛇穴を出て半畳の風封ず

鈴木 均

前句は季語と内容の組み合わせが見事。和的な艶の滲み出を評価したい。後句は、己れや場の確認をうまく具体化している。特に「半畳」という設定が効いている。

鈴鹿 仁

やまぶき

やまぶきや小判大判捕物帳

一杓に雲を泛べて花まつり

なんでも屋覗きやすくて春の昼

三門へ弥生の雲の知足たり

どこからも比叡を拝す花洛の忌

近 詠

和田 照海

狸 汁

神島は清盛びいき牡蠣打女

石鎚の峰より高くでべら干す

化かされてまづ舌を焼く狸汁

鳴く魚より糶られてをりぬ春隣

灰寄せのしばらく土筆野のそぞろ



入院續く 北村 香朗

絵のように遊べる富士に冬の雲
冬の雲ちぎれては亦近よりぬ
よく晴れて窓一杯に富士の雪
咲きほこる冬の花鉢いつまでも
よく動くどの看護師もマスクして

浮 氷 藤岡 紫水

せせらぎの誘ひに映えて猫柳
やはらかき遺影の翳り凍てゆるむ
光りつつ日日遠ざかる浮氷
下萌や踏めば足裏に地の息吹き
バレンタイン結ぶリボンに光る夢

松田 都青

最後まで雪が降りゆく物語
薄氷に胸の十戒写りをり
除雪車の駄々こねるごと動きけり
正月やぼんやりしてゐる膝小僧
身軽るとはかかることも風花す

葉 櫻 竹貫 示虹

葉櫻のまつ只中に残されし
いつの間に師の齡越えし葉の櫻
母の日の風樹の嘆をいまさらに
薬の日病ひ小出しに長生きす
はつなつの海の方角風見鶏

服部 郁史

流離めく男心や日昏れ鷺
晩年の昭和は痒し泡立草
二枚目の文の余白や風花す
一竿は病衣干されし芽木の風
頑固さとやさしさ梅の影一本

落 の 臺 柴田 朱美

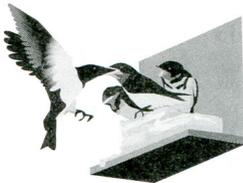
落の臺鼓動たしかに土匂ふ
望郷の山河は遠し落の臺
たそがれに母性濃くなる落の臺
落の臺村の親睦はじまれり
武骨なる手が落の臺掴みけり

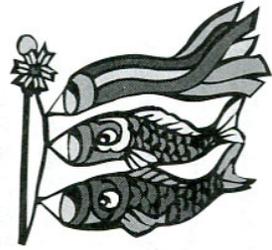


野火丸井巴水
 目覚めたる鯉の瞳や桃の花
 雪へ傘ひらき腰より歩き出す
 寒梅やここを直さば個性なし
 庭石は立ちづめ寺の玉座冷ゆ
 風神の位置定まりて野火となる

小堀寛
 初日の出黒い鴉よ生きてくれ
 或る女祖母といふ冬怒涛
 賞罰なくて余命あり年男
 にごり酒透きとほりゆく兵よ
 ひとり言花には水をふたり言

塩貝朱千
 地球儀のどこかが汚れ白すみれ
 啓蟄や夢占ひは吉と出し
 白梅や故郷に手向く一行詩
 丹の橋の半ばに佇ちて梅の風
 梅ふふむひとすぢの陽を抱きしめて





京鹿子集

豊田都峰選

梟の闇のうしろにゐるふくろふ

雪女もどる約束してしまふ

ひろびろとわれのありけり初山河

待春のなにかの紐を引いてゐる

鉛筆の芯を尖らせ初句会

寒紅や花びら餅を手みやげに

筆始生け花の水換へてから

遠き日の押し競まんぢゆう初詣

蛇穴を出て半畳の風封ず

神木の動かざる息鬼やらい

亀岡 井上菜摘子

京都 山本 正

鈴鹿 均
〔改め〕 呂仁

着信に接ぎ穂の震へ冴返る

一輪の水仙席を一つ待つ

春立ちて横文字名刺増刷す

独り言オクタープ上げ春立つ日

冬夕焼こよなく愛す友一途

半生を一夜で語る寒の雨

積雪に車数台足とられ

快癒して毘び合ひの冬のバラ

一晚の樹氷の神秘息を呑む

早春は名のみのことと便りする

アリソナ 伊吹 之博

澁川 東 秋茄子

松の内過ぎて参拝父母の墓

さいたま

神田 惣介

父母の顔ピカソ流なり卒園展

末つ子が勝つて円満歌留多とり

子等揃ひ秘蔵のワイン雑煮かな

ビツクバン百三十七億年後の初日かな

千葉

河内 桜人

光琳の金銀溢る二月かな

冬銀河渡り給はば即浄土

大寒や南子名告りの今は無し

凍瀧は天空ささへゐて寡黙

つごもりの闇に流るる煙草の火

寒月光人のかたちが角曲がる

鮫鱈に箸うやうやし卒寿かな

梅一輪せつない石を立てかける

生きしろはまだまだ柚子の香りほど

枯れまいとたそがれまいと立つ木かな

東京は雪いつでも死は突然

初詣鈴の音續く人續く

砂利踏みて詣つ社に年明くる

初髪と思ひつ梳きし今朝の櫛

晴天の恵み広しと年明くる

校庭の手足伸びやかなる枯木
ひかへめに生き一村の軒氷柱

佐々木紗知

寒鯉は他人貌して鱮垂るる

まつくずに水の真昼や迎春花

もう一度振り向いてみる離れ鴛鴦

校庭の影は三角冬木の芽

鼠一匹住みついてゐる鬼遣らひ

幾度も淵を逸れつゝ別れ雪

柏手のひと際高し受験の子

松明けるホットケーキの妻の昼

討ち入りの杖に貞女や初芝居

風邪心地コンビニに買ふ袋粥

大空の碧を掴むやいぬふぐり

熱下げし子の寢息聴く遠うぐひす

呑んべえの口笛透けり冴返る

犬ふぐり踏まずに捕へ鬼ごっこ

もう終はる点滴の滴寒満月

寒晴れや眼下見わたす二十階

遠き友尋ねてくれる去年今年

無事息災願ひ重ねて屠蘇に酔ふ

一手間の豆のふくらみ年用意

嘆きし娘の涙一すぢ初鏡

松納むたつたひとりで飲むココア
黄水仙居間に一輪句座まろし

岡山 敦子

直江 裕子

伊藤 希眸

浦安 安田 一郎

松戸 児玉 有希

岡田 愛子

布川 孝子

高野 春子